

平成4年4月9日

歴史の裏方のさらに裏方を担った無名の女性たちの姿...

聞き書きによる女性史

風の交叉点 ~豊島に生きた女性たち~ 出版

10日から、区役所情報公開コーナーで発売。15日からは区内書店でも。

豊島区に住む68～100歳の女性26名が自分の言葉で自分の人生を語る画期的な女性史『風の交叉点～豊島に生きた女性たち～』が、10日から区の情報公開コーナー(東池袋1-18・区分庁舎A館1階)で発売される。また、15日からは区内の書店にも並ぶ予定。豊島区女性青少年課編、発行ドメス出版。定価は1,545円(消費税45円含む)だが、情報公開コーナーでは消費税分を除く1,500円で販売する。発行部数は、2,000部。

この『風の交叉点』は、1988年に策定された豊島区婦人行動計画『としま150プラン』でうたわれている『女性史の編纂事業』として、歴史の裏方のさらに裏方に位置づけられてしまった無名の女性たちの声や姿から様々な生きざまを学び、分かち合うとともに次の時代にそれらを伝えることを目的に出版された。

取材・編集は、豊島区が一般区民から公募した女性編集委員25名が担当。丸1年をかけて語り手それぞれの人生をインタビューし、一冊(約260頁)にまとめた。

本編は、第1章『職業を通して』、第2章『まちに生きる』、第3章『家族とともに』に分けられており、その第1章では、女性が職業をもつことが社会的に認められていなかった時代に自らの意志でバスの車掌、教員などの職業をもった女性、また自分の意志とは無関係に女工や芸妓として働き続けた女性の生きざまが語られている。

第2章では消費者運動や保護司、地域文庫活動など社会への貢献に身を投じながらも、家事に支障がないように、家族に迷惑をかけずにという自己規制をしつつ、自分の人生を自分らしく生きる努力をし続けた女性の姿を、また、第3章では、夫に自分の人生を重ね、家庭を自分の人生の中心に据えて生きた女性たちのひたむきな姿を紹介している。

女性青少年課では、「女性史を綴る場合、ひとつには、可能な限り大勢の人と出会い、または項目を定め、集中的に聞き集め、女性であるが故の共通項を見つけ、個人のことではなく、一般化、普遍化して差別の構造を浮き彫りにしていく方法もありますが、今回はあえて、一人ひとりの聞き書き集としてまとめました。一人の女性の生きざまを通して、隠された構造的な女性差別の全体像に迫りたかったのです」と、編集の意図を話している。

また、編集過程での感想について、直接編集に携わった編集委員たちは「話し手と聞き手の間に、信頼関係や人間的思い合い、同じ女性としての交流などが生まれるためには、多くの時間を費やさざるを得ませんでした。しかし一方で、ここまで知り合えたのだから『あなたなら話せる』という時間も生まれ、『はたしてここまで聞いてしまってよいのだろうか』と驚く場面もありました」と、話している。

ちなみにタイトルの意味は、「『風』には力強さと優しさを、『交叉点』には、ターミナルとしての池袋にちなみ、出会う、すれ違う、立ち止まる人生という意味を込めました」（女性青少年課）という。豊島区では、さらに続刊を計画している。

問合せ 女性青少年課 男女平等推進センター(6月10日開館)担当

